

保育環境

保育園は、伝統的な日本建築です。

床材は県産材のヒノキ、壁は漆喰、釘を使わない大工さんの匠な技で建てた

気持ちの良い園舎です。

園舎の中も床下も、南北に風が抜けて、建物は絶えず呼吸をして空気はいつも新鮮です。

へやの棚には、木製の玩具が整然と並んでいて、

ダイナミックに遊ぶ日は園庭北側にあるアトリエに移動します。

単純な仕組みの木製玩具を選ぶわけ

ドイツ、スイス、スウェーデンなどで職人さんが手掛けたロングセラーの木製玩具、デジタルな時代であっても乳幼児期に欠かせません。

五感を使って、見て触ってなめて匂って、音も聞いています。

玩具は子どもが主体的に遊べて仕組みは単純であることが重要です。

1. 例えば汽車と線路の木製玩具

子どもは汽車を手に持ち車輪を線路の溝に合わせて走らせ、心地よさを掴んで夢中になって遊びます。

坂道を登るときは、汽車を持つ手に重さを感じ、下りでは勝手に進んでいく感覚に出会います。

遊びも自然の秩序と一致しています。

2. 例えばモビール

モビールのそばを人が通れば静かに動き、窓や扉の開け閉めで回りだし、

息を吹きかけたり指先でツンと突くと上下に動き、激しい風が吹き込むと大暴れをします。

ぶら下げているだけですが子どもにとっては不思議がいっぱいです。

モビールは子どもの追視だけが目的ではなくて、思考をゆるめて情緒を安定させます。

3. 単純だから、分析ができる修理ができる

子どもは玩具で遊びながら、どのようにして作られているのか、年齢にあった分析をはじめます。

ここに穴を開けて軸を通してタイヤをつけている、カタカタ音がするのはこの部品がこっちの出っ張りに当たるから、

そんなことを考えているのは特別な子どもではありません。

どうなっているか分析できる単純な玩具に出会っているだけです。

木製の玩具は、大抵の場合修理をして使えます。

壊れたから処分という習慣はありません。

高価だけど、是非使わせたい

例えば、「安いから壊れてもいい」ものを準備するのか、「高価だけど、是非使わせたい」ものを揃えるのか。おとなの声がけも関わり方も、モノの取り扱い方も違ってきます。その毎日が人の価値観を育て、その考えの中で保育をすることになります。手で触って遊ぶうちに、どちらのものであっても子どもの肌が覚えます。壊れてもいい物と是非使わせたい物、その違いはとて大きく感じます。

環境が育む

子ども8人に異なる8種類の手しごとが準備されます。それぞれがとても魅力的です。同じ遊びはひとつ、したい子どもが複数いてもひとつしかありません。お友だちがする様子を見ることも順番を待つことも大事な時間で、自分がするときには備える時間です。机をお友だちと共有しないのは、集中して作業に取り組む環境作りです。

アトリエ

ネフ社のつみき、WAKU BLOCK、コルクつみき、パターンブロック、アンカーつみき、ドミノ、スカリーノ。積木はバランス感覚や微調整が必要な建設的な遊びで、凹凸の組み合わせではなく重力に従って積み上げていきます。大きな作品は自分の体がぐらぐらしないように、手足がうっかりと作品にあたらないようまわりに配慮した身のこなし方が必要になります。アトリエでは、十分な積木の量と夢中になって遊べるようなスペースを準備しています。

子どもの感覚はとても繊細です。自然の光を感じ、雨音を聴き、季節を香り、植物や虫に触れ、質の良い遊びで五感を十分に使うことができる環境で、私たちも子どもと一緒に喜びあう毎日を大切にしています。
